

前作麦うね幅の拡大による間作大豆の増収

千 田 長 二・清 原 悦 郎

(岩手県農試九戸分場)

岩手県北部の麦間作大豆の低収性は、麦間作期間がおおよそ60～80日の長期間にわたることも大きな原因であるため、一般に前作麦のまき巾率を低めたり、少肥栽培を行って大豆の収量を安定させているのが現状である。筆

者等は1955年以降3カ年にわたって試験を行った結果、前作麦の栽植方法によって麦・大豆双方の安定多収が可能であることを知ったので報告する。

1. 試験方法

1. 1955～'56 (3ブロック 乱塊法)

番号	小 麦 (ナンブコムギ)		大豆 (農林4号)		番号	小 麦 (ナンブコムギ)		大 豆		備 考
	うね巾	まき巾	種まき位置	株 間		うね巾	まき巾	株 間	品 種	
1	60cm	18cm	うね間	24cm	11	60cm	18cm	24cm	農林4号	7月19日小麦刈取り 5月19日大豆まき
2	"	"	隔行両肩	"	12	"	"	"	十勝長葉	
3	90	27	うね間	16	13	90	27	16	農林4号	
4	"	"	うね間2条	32	14	"	"	"	十勝長葉	

2. 1956～'57 (3ブロック 乱塊法)

番号	小 麦 (農林27号)				大 豆 (十勝長葉)		備 考
	うね巾	まき巾	施 肥	種子量	株 間	種まき位置	
1	60cm	18cm	標準	標準	24cm	うね間	7月17日小麦刈取り 5月15日大豆まき
2	"	"	"	"	"	隔行両肩	
3	90	27	"	20%増	16	うね間	
4	"	"	20%増	標準	"	"	

3. 1957～'58 (3ブロック 乱塊法)

番号	小 麦 (ナンブコムギ)		大 豆 (十勝長葉)		備 考
	うね巾	まき巾	株 間	種まき位置	
1	60cm	18cm (30%)	24cm	うね間	7月16日小麦刈取り 5月16日大豆まき
2	"	" (")	"	隔行両肩	
3	90	27 (")	16	うね間	
4	"	36 (40%)	"	"	

2. 試験結果及び考察

3カ年ともうね巾を広げ、ほぼ同一まき巾率でまいたが、小麦は有意差はなかったが減収傾向(平均7%)を示した。その理由は穂数減にあり(平均19%減少)、おそらく分けつが有効化しないためと思われる。

大豆は広うね区が総平均で19%、1957～'58年の十勝長葉の平均で40%も増収した。しかし詳細にみれば1956年のように前作麦が特に多収でない場合は大差がなく、

麦間作期間の長い当地方でも前作麦があまり上出来でなければ(約4～5俵以下)、間作大豆はさほど害をうけないことが知られる。麦も普通以上にとり大豆も安定多収を図ろうとするには、慣行である60cm程度から90cm位までうね巾を拡大してまき巾率を30～40%におさえることは極めて有効であるだけでなく、一方では畜力あるいは動力機械による中耕培土も容易に行えて省力上有利であり、更に早生大豆の導入も容易となる。

試験成績の1. (1955 ~ '56)

番号	小 麦				大 豆			備 考
	かん長	1 m ² 当り穂数	10 a 当り全重	同子実重	茎 長	10 a 当り全重	同子実重	
	cm		kg	kg	cm	kg	kg	
1	75.7	300 } 100	716 } 100	276 } 100	65.3	539 } 100	219 } 100	有意差はない
2	76.3	293 } 100	750 } 100	287 } 100	63.5	512 } 100	213 } 100	
3	77.3	223 } 75	608 } 85	227 } 82	73.1	552 } 106	207 } 98	
4	76.4	220 } 75	634 } 85	232 } 82	63.1	557 } 106	217 } 98	
11	76.2	287 } 100	733 } 100	261 } 100	64.9	568 [100]	242 [100]	大豆品種 F=17.3**
12	76.9	273 } 100	701 } 100	293 } 100	41.7	384 (100)	201 (100)	
13	73.6	209 } 82	647 } 91	281 } 98	63.6	554 [98]	226 [93]	
14	78.1	249 } 82	656 } 91	264 } 98	43.8	404 (105)	210 (104)	

試験成績の2. (1956 ~ '57)

番号	小 麦				大 豆				
	かん長	1 m ² 当り穂数	10 a 当り子実重		7 月 23 日				10 a 当り子実重
	cm		kg		茎 長	分枝数	節 数	節間長	
	cm		kg		cm			cm	kg
1	113	363 } 100	468 } 100	44.0 } 100	0.1 } 100	6.5 } 100	19.6 } 100	49.0 } 100	154 } 100
2	110	363 } 100	439 } 100	45.9 } 100	0.2 } 100	6.4 } 100	19.6 } 100	50.5 } 100	153 } 100
3	112	284 } 77	423 } 92	48.0 } 92	1.3 } 303	7.7 } 120	16.2 } 84	59.1 } 120	211 } 140
4	112	272 } 77	408 } 92	48.4 } 92	1.8 } 303	7.8 } 120	16.9 } 84	60.2 } 120	221 } 140

注：うね巾間の有意差（節数 F=9.65*, 節間長 F=13.74**, 子実重 F=64.51**）.
節間長は子葉～初生葉節間。

試験成績の3. (1957 ~ '58)

番号	小 麦				大 豆				
	かん長	1 m ² 当り穂数	10 a 当り子実重		7 月 17 日			10 a 当り全重	同子実重
	cm		kg		茎 長	節 数	平均節間長		
	cm		kg		cm		cm	kg	kg
1	93.8	420 } 100	339 } 100	19.8 } 100	4.4 } 100	4.5 } 100	29.5 } 100	174 } 100	60.8 } 100
2	93.7	453 } 100	318 } 100	23.3 } 100	4.7 } 100	5.0 } 100	33.7 } 100	189 } 100	61.5 } 100
3	96.7	382 } 88	328 } 100	23.6 } 107	5.1 } 113	3.6 } 85	43.5 } 124	240 } 126	91.5 } 139
4	97.9	384 } 88	328 } 100	23.3 } 107	5.2 } 113	4.5 } 85	34.6 } 124	216 } 126	78.4 } 139

注：うね巾間の有意差，大豆収量 F=5.65*

大豆の早期移植栽培について

第1報. 播種期・移植期

佐藤 隆・椎名嘉蔵・清野昭雄

(山形県農試)

1. 試験のねらい

山形県の大豆作を見ると県平均収量は10 a 当り 104 kg という極めて低い数字を示しておる。

この生産量の低い原因となっておるのは，大豆の連

作・品種選定の拙劣・病虫害防除の不徹底・土壌改良と施肥改善に対する無関心等数多く指摘されるが，根本的には栄養生長量が少いことと，また栄養生長量の増加を図った多肥早播栽培での蔓化徒長による稔実の低下にあるものと予想される。